

クローズアップ

『青年部会と後継者育成』

広島県鉄構工業会・青年部会の足跡

【第1回】

後継者および人材の育成は、ファブリーケーター業界でも重要な課題だ。各県鉄構組合や各県青年部会は、この課題解決に向けてさまざまな取り組みを行っている。そのなかで、広島県鉄構工業会(理事長 山本泰徳・ステントス社長)は青年部会を解体・リニューアルする全国的に珍しい取り組みを実施した。目的やその後青年部会の現状について全3回にわたり紹介する。

停滞期との決別

広島県鉄構工業会の青年部会(部会長 船山聖喜・三和鉄構建設尾道工場長)は、2015年8月のリニューアル決起集会以降、水性さび止め塗料の実演見学会、柱脚施工の勉強会、東京製鉄岡山工場の工場見学、ローバル工法講習会などを開催したほか、日本建築学会中国支部主催のセミナーで講師を務めるなど、この1年半、会員のスキルアップを目的として事業を活発



山本理事長

に展開している。しかし、同部会が昔からこのように活発な活動を行っていたわけではない。数年前の総会では会員13名のうち6名しか参加しないという低迷期があった。それが一昨年のリニューアル決起大会を機に、会員数は2倍以上の27名に増加、活動も活発化した。その軌跡を追う。

リーマン・ショックを機に衰退

リーマン・ショックを機に衰退した。リーマン・ショックによる経済環境の悪化に伴い、青年部会は存続自体が問われる状況となり、活動は著しく低下する。それでも鋼材商社による「今後の鋼材の動向について」をテーマにした講演(10年度)、「ハイドロカット講

習会」(12年度)などキラリと光る活動を実施してはいた。だが、単発的で青年部会の組織としての躍動感も失われていた。それを象徴するのが、13年度の総会だ。通常5月末から6月初めまでに開催される総会が、8月に入ってから開催され、総会出席者も6名と幹事会並みの出席しかなかった。この要因には、会員数の減少が続ぎ、マンパワー不足のものが不足する事態に陥ったことが挙げられる。青年部会の部会長は、親会の理事会に出席して活動を報告することになった。12年度・13年度は報告する活動がないこともあって、部会長はほとんど欠席し、一層親会に活動の低下を印象付けることとなった。

親会の機

こうした状況に親会も危機感を抱き、13年度から助成金を20万円に半減させる。これは親会から青年部会に対するショック療法と活動に対する不満の表明だった。親会としては、青年部会が助成金半減に危機感を感じ、活動の活発化へ向けてどのように取り組むかを見守ることに決めたものだ。しかし、同年は、のちに行政の若手担当者が参加する端緒となった「耐震補強工事講習会」を開催した以外はこれといった活動らしい活動は行われていない。そこで、14年度に新しく就任した山本理事長は、その年度末の理事会で「当組合員は、創業者から2世、3世の世代に引き継がれ、次の3世、4世への引き継ぎにはしばらく時間がかかる。今後10年からは後継者、つまり青年部会の構成員が少ない時期を迎えるということだ。現状を放置すると青年部会の活動はますます低下しかねない。そのため、組合員75社から若手技術者を出して青年部会を拡充し、活性化していきたい」と業界動向を分析したうえで、リニューアルが必要と決断した。そして、「構成員に所属する若手の技術者、技能者

を集め、ポリウムのある集団にし、現在、大学教授らと行っている勉強会(日本建築学会中国支部傘下の鉄骨製作部会)とコラボレーションを図り、勉強会も今以上に活用していきたい」と述べ、青年部会の会員資格を後継経営者に限らず、若手技術者、技能者にも門戸を広げ、会員の拡充を図る方針を表明した。青年部会を活発化する。とで所属する企業および組合員の中核を担う人材育成を目指した。この方針表明を基にリニューアル青年部会の取り組みが開始されることになる。(実末和也)



マツダスタジアム見学会(08年8月)